



平成31年の新春対談は、俳人・対馬康子氏と西川区長が、日本の豊かな芸術文化の一つである俳句を中心に、荒川区の文化振興や、区の未来を担う子どもたちへの思いについて語り合いました。

俳句で子どもたちの心を豊かに

司会 対馬先生の俳句との出会いと、荒川区の俳句振興に関わられたきっかけを教えてください。

対馬氏 私が俳句を始めたのは大学1年生のときで、俳人・中島斌雄氏の下に入門したことがきっかけです。昔から本を読むことがとても好きな子どもで、学校から帰って家にある本を読むのが、楽しみの一つでした。また、毎日のように貸し本屋さんに漫画を借りに行くような女の子でした。中学校・高等学校では文芸部に入り、そこで詩を書いたり、文章を発表したりして、その延長線上で俳句を始めたんです。詩から俳句へという経過をたどったので、とても自然に俳句というものに親しむことができたと思っています。

区の俳句振興に関わるきっかけとなったのは、「俳句のまち宣言」です。「奥の細道矢立初め全国俳句大会」や「一茶・山頭火俳句大会」等に参加しているうちに、「奥の細道千住あらかわサミット」の実行委員の任命をいただき、「俳句のまち宣言」にも関わることになりました。その後も、さまざまな俳句振興に関わらせていただいています。



区長 アーサー・シュレジンジャーというケネディ大統領の特別補佐官を務めたアメリカの歴史学者が、日本で講演をされた時に「子どもは未来社会の守護者である」とおっしゃっていたんですね。私はその言葉に強く心を打たれまして、自分が政治家になったら、その考えを主張していこうと決意し、今までやって参りました。未来を守る子どもたちのために、子どもたちの能力を広げていく責任が我々にはあると思っています。

区でも子どもたちに向けた俳句の催しをたくさん行っています。その一つが「奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会」です。土俵を築いて呼び出しをすると、東西に分かれた子どもたちが長い紙に書いた俳句を見せて読み合うんです。

対馬氏 この大会も今年で10回目を迎えますね。子どもたちもどんどん上手になっていて、毎年良い句が誕生しています。ぜひ、多くの方に観戦していただきたいです。子どもたちの俳句は、先入観のないまっすぐな、とても気持ちの良い句が多いですね。また、中学生と英語の俳句を作ったり、「俳句ハイク」と題したバスツアーで秩父に行って俳句を作ったりもしました。

区では「読書のまち宣言」もされ、読書にとっても力を入れていますよね。読書はさまざまな道で役に立ち、人生が豊かになっていくことを実感しています。ゆいの森あらかわには、何万冊もの児童書を所蔵されていると伺っています。ぜひ、皆さんにたくさん利用してもらい、本に親しんでほしいです。

区長 俳句を通して区の魅力を積極的に区内外に発信する取り組みも進めています。その一つが「都電DE俳句」です。区のPRラッピングを施した都電に乗車し、沿線の観光スポットで俳句を楽しむ催しです。また、松尾芭蕉や正岡子規等、著名な俳人が多くの句を詠み、区内各地に句碑が建立される等、区は俳句ゆかりの地です。平成27年には「奥の細道千住あらかわサミット」の開催を記念し、「矢立初めの地あらかわ」のシンボルとして、南千住駅西口駅前広場に松尾芭蕉像を建立しました。

対馬氏 区は芭蕉の時代から俳句と縁が深いですね。俳句と写真をセットにした「フォト俳句コンテスト」も面白い催しです。散歩をしながら俳句を作ることを「吟行」といいますが、観光スポットを記載した「まちあきマップ」等の観光パンフレットを片手に俳句ゆかりの地を巡って、歴史をたどりながら吟行したり写真を撮ったりするのも楽しいと思います。

あらかわの財産であるモノづくり

司会 本日の対談を記念して、対馬先生が区民の皆様に向けて新春の句を作ってきてくださいました。この句に寄せた先生の思いを教えてください。

対馬氏 「モノづくり ことばを創る 明の春」という句です。「明の春」というのは、新しい春をことばで季語の一つです。新年と同じですね。「モノづくり」というのは、区はモノづくりのまちだということですが、本当にその通りだと思っています。吟行でまちを回ったときに、リヤカー屋さん・自転車屋さん・三味線屋さん等何って話を聞いたんですが、一つひとつがとても面白く、深く感動しました。区には伝統工芸がたくさん



ありますよね。丹精込めてモノを作るということは、「モノに命を与えることだ」と思ったんです。命を与えるということは、言葉を紡いでいるということにつながると考えて、「モノづくりは言葉を作ること。それは俳句を作ることに重なっていく」、そういった思いでこの句を作りました。

区長 素晴らしい句ですね。区はもともと職人さんのまちであり、「モノづくりのまち」と冠して「モノづくり見学・体験スポットガイド」の冊子を作成しています。モノづくりは区の財産だと考えています。



▲対談は和やかな雰囲気で行われました（右は司会のケーブルテレビ・中西アナウンサー）

俳句から広がる輪

対馬氏 俳句ブームもあり、俳句を始めたいと思っている方もいらっしゃると思います。俳句は道具もいらない、年齢も職業も関係ない、今すぐにも始められるものだと思います。よく俳句は難しいと言われるんですが、決してそんなことはありません。作りたいと思ったときに、まず季節の言葉を入れて、5・7・5のリズムで言葉を当てはめてみる。それが第一作の俳句になると思うんですね。俳句は日記のようだとよく言いますが、日記を書くようにその日にあったこと、うれしかったこと、悲しかったことを思い、きれいな花等を見ながら言葉にしていくと俳句ができて、また俳句が作りたいなという思いが湧いてくると思うんです。西川区長は与謝蕪村の「月天心 貧しき町を 通りけり」という句に感銘を受けたとお聞きしましたが。

区長 そうなんです。アーサー・セシル・ピグーというイギリスの経済学者が、ロンドンの貧しい

まちを、まさに月天心、月が空の真ん中から照っている日の夜に歩いて「理論経済学も大事だけれど、貧しい人を救うための経済学者でいることが大事」という趣旨のことをおっしゃったんですね。私はまさにそれが地方自治の根本なんじゃないかと、若いころにそう思ったんです。

対馬氏 区が「俳句のまち宣言」をして俳句振興を進めていくということが、単にまちおこしというだけではなく、西川区長の「区民を幸せにする」という発想から生まれているということに、私は感動しています。俳句は人の心を豊かにし、人と人とのふれあいを作っていくものだ、だからみんなで一緒に作りましょうという、その根元に共感し、少しでもお役に立てればと思っています。

「俳句はあいさつ」とも言いますが、家族の中でも俳句であいさつをすると面白いと思います。季語は入ってなくてもいいので、5・7・5であいさつをしていくと、家族も笑い声が絶えない

でしょう。お友達と「俳句を作ろうよ」と、お菓子を食べながら、気軽に俳句に慣れ親しんでほしいなと思っています。そして、俳句のまちという輪が少しでも「明の春」として広まってほしいなと思います。

区長 私は、区政は「区民の皆様幸せにさせていただくためのお手伝いをするシステム」だと考えています。一人ひとりそれぞれの幸せがあります。それを私どもがどのようにお手伝いするのか、その一つの手段として俳句があるということ、対馬先生をはじめ、俳句の先生方から教えていただいています。区もさまざまな形でお手伝いができるのではないかと考えています。

お年寄りに安心して暮らしていただく、子どもたちに未来を見てのびのび輝いてもらう、そして自然災害からも区民の命をしっかりと守るということ等を、職員一丸となって、区民の皆様のためによりよく決意でございます。

本年もよろしくお願いいたします。

